

14. 墓とその供養

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 佑季子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46936

14. 墓とその供養

小林 佑季子

1. はじめに
2. 全国的な墓の概要とその変化
3. 上町地区の墓の概要とその変化
4. 新しい形式の墓と供養
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

農山村地域である能登町旧柳田村地区において多くの住民の方のお話を伺う中で、この地域においては、どのような墓と供養に関する変化があり、どのような新しいあり方が生まれたのかということに関心を持った。

近年、都市部を中心に墓や供養への考え方が変化しつつある。墓を建ててもお参りする人がいない場合も増え、その対策として永代供養が注目を集めている。また、永代供養は関東地方などの都市部に多い供養の仕方であるが、上町地区においても永代供養、ペット供養などの新たな取り組みを行っている寺があると知り、とても興味深く感じた。

以下、全国的なものと比べながら、従来からのこの地における墓や供養について触れ、それらの変化をまとめ、それを受け生まれつつある新しいあり方について述べる。

2. 全国的な墓の概要とその変化

本節では、榎村久子『お墓の社会学』（2013年）を参考に、全国的な墓の歴史や社会変化に伴う墓のあり方の変化についてまとめる。その他、関連情報のあるホームページも随時参照した。

『お墓の社会学』によると、私たちがよく目にするのは「公園墓地」と呼ばれるものであり、1923年に造られた多磨霊園が日本初である。それまでの暗く非衛生的な墓地のイメージを革新し、現代にまでも大きな影響力を持つ。その反面、以後の墓地の計画を画一化することになったとも言える。

2.1 納骨

ここでは「便利わかりやすい【マナーとビジネス知識】冠婚葬祭マナー&ビジネス知識」というホームページを参考に、仏教における一般的な納骨について紹介する。

このホームページによると、火葬後の遺骨は骨壺に入れてしばらくの間供養し、そのちに墓に納めるとのことである。墓への納骨が最も一般的である。他には遺骨を納め

のための建物である納骨堂に納骨することもあり、その際は契約した区画に遺骨と位牌を納める。「期限付き納骨」と「永代納骨」の二つがあり、前者は墓が用意できるまで一時的に利用されることが多い。

仏教では納骨を行う期限は決まっていないが、忌明けとされる四十九日法要の後に行うことが多く、普通は遅くとも三回忌までのいずれかの法要で納骨を済ませる。

2.2 墓の歴史

次に、墓の歴史について、上町地区での聞き取りをもとに簡単に述べる。

寺分地区に位置している高野山真言宗の寺である平等寺のご住職（男性、76歳）によると、江戸時代以前は農民に経済的な力はなく、自然の石を使った簡素な墓が多かった。また、小さな地藏菩薩を墓としてまつこともあった。その後、江戸時代末期からきちんとした石の墓が造られ始めた。江戸時代、真言宗は土葬、浄土真宗は火葬を行っていた。明治時代や大正時代まで、真言宗は皆土葬であったと考えられる。

また、上町在住のAさん（上町、男性、71歳）に能登最古の墓をご紹介いただいた。それは珠洲市大谷町にある平時忠の墓である。平時忠は「平家にあらずんば人にあらず」という言葉を残したことで知られる武将で、約800年前に三種の神器「ヤタノカガミ」を源治に渡すことで、打ち首を逃れて能登に配流された。時忠の墓には「五輪の塔」と呼ばれる真言宗の五つの世界観を表した塔が建てられている。

ここからは、『お墓の社会学』（2013：37-42）を参考に、現代の墓に対する考え方の変化をまとめる。

家族が多様化している今、家の墓を継いでいくのは難しくなっている。

死者が亡くなった衝撃や悲しみを癒すためには時間が必要であり、本来墓はそれを支える装置であった。しかし、土葬から火葬へと変化しそのような時間がなくなったこと、家族の形が多様になり、墓が継承されるかわからないこと、代々同じ地に住み続けることが難しいことなどの要因により墓の性質が変化してきている。家族の形態が一代に限りなく近づいていることが墓地の時間性を大きく変えている。

農山村地域では、「先祖代々の墓」や「家の墓」に入りたいという人が多い。反対に、核家族世帯や新しい開発地の住宅地域では、先祖の墓に入りたいと答える人の割合は少なく、お墓の形式にはこだわらないが、「家の墓」を望む人が多い。家族が個人化する中で、「家の墓」によって、家族であることの証明としたいのではないかと考えられる。

近年は、墓の維持を期待し子どもに負担感を持たせることを避けるなど、夫婦を中心としたライフスタイルや意識の変化により、子どもの生活や生き方を大切にするようになった。墓にまつわる考え方の変化として、「以前は子孫が親や先祖という過去のためにお墓を建立したものだが、現在は生きている者が自分の未来の死のために建てている」（槇村 2013：42）と槇村は述べている。墓は現在の自分の家族の形態や生き方を写したものであるため、これからは個性に応じた墓のあり方が求められている。

2.3 新たな形式の墓

『お墓の社会学』（2013：22-25）の中では、新しい墓の形式として個人墓、夫婦墓、両家墓、合葬墓などが挙げられていた。これら4つについて簡単にふれる。

個人墓は、シングルの人、離婚して子どもがいない人、自分一人の墓が欲しいという人が建てる。観音像、オリジナルなモニュメント風の石碑、角柱の石碑等さまざまな形がある。

「個人墓を望む人には継承者がいなく、生前個人墓を造る人が多い。しかし、家族や継承者がいても、墓所の区画が大きい場合は、個人ごとに造ることもできる」（槇村、2013：22-23）。

夫婦墓も継承者がいなくてもいいように、永代供養墓として造られる場合が多い。個人墓と同様、さまざまな形がある。

両家墓は、たとえば同じ墓所に二つの墓石を置く、一つの墓石に両家の名前を彫る、などして、同じ墓地に夫婦両家の墓を設けるものである。近年の一人っ子同士の結婚の増加がその背景にある。夫婦の両方が一人っ子の場合、それぞれが二つの墓を継ぐことになるため、改葬して同じ墓地に新たに造るほうがよいという考えから生まれた。妻の親が娘の家の墓を建てられるよう区画の少し大きい墓所を選ぶこともある。

合葬墓は、都市部では市民の需要に墓所の提供が追いつかないことや、市民のライフスタイルの変化により、自治体でも開設されている。東京都多磨霊園をはじめ、日野市、横浜市やさいたま市など数多くある。こちらについては以下にも述べる。

2.4 合葬

新たな形式の墓の中でも、合葬については後ほど善唱寺での合葬に対する考えを取り上げるが、ここでホームページなどを参考に簡単に説明する。

合葬とは「2人以上の遺体や遺骨を、1つの墓に合同で埋葬することを意味する語」である（『日本語表現辞典 Weblio 辞書』の実用日本語表現辞典）。合葬が行われた墓は「合葬墓」や「合祀墓」と呼ばれる。不特定多数の人々の遺骨を一か所に埋葬する形式もあり、近年では自治体や民間業者によって盛んに行われている。この背景には、少子化に伴い家ごとの墓石の維持が困難になってきたため、予算のかからない埋葬法として、合葬が注目されたということがある。

「暮らしづくり 終活：お墓」というホームページによると、永代供養墓の中でも、合同で埋葬される墓に限定して「合葬墓」と呼ぶそうである。概ね100名以上が納骨できる大規模な墓で、骨壺ごと納骨する場合と、遺骨だけを取り出し故人を特定できない形で納骨する場合がある。

費用には幅があるが、寺院境内墓地・民営墓地の場合は1体20～80万円くらい、公営墓地は数万円くらいが目安である。

3. 上町地区の墓の概要とその変化

3.1 納骨と供養

上町にある真宗大谷派の寺である徳宝寺のご住職（男性、48歳）によると、納骨は遺族の予定が合うときを見はからい、四十九日や一回忌などの法要の際に行う。多くの人は四十九日法要の後に納める。従属する子寺⁴⁾の僧が納骨に立ち会い、お勤めを行う。

墓は骨箱に入れられた後、木箱に入れられる。木箱には大小があり、小さい箱にはのど仏の骨が入られる。ご住職の奥さんによると、これはのど仏の骨は仏様が座っているように見えるためである。のど仏がない場合は通常上のほうから骨をとることになっており、はっきりとその骨は定められていない。

また、同じく上町にあり、徳宝寺の下寺にあたる宝樹寺のご住職（男性、74歳）によると、頭部の骨を小さな箱に入れ、京都の本山に納める人も多かったそうである。これには10～12万円の費用がかかる。しかしながら、強い信仰心のもと子に自らの骨を本山に納めるよう託す親も多かった。

昔は親鸞聖人のお膝元が最も成仏しやすいという考えが強かったため、京都の本山に納める人が多かった。しかし、近年ではそのような人は少なくなっている。神和住にある善唱寺のご住職（男性、68歳）も、以前は距離や金額の関係から、本山に代えて金沢の別院に納骨する人もいたが、近年では本山にも別院にも納骨しない人が多いと話していた。

善唱寺のご住職は1986～96年くらいに、本山に納骨するための料金を前払いした。事前に支払うことにより、多少料金は安くなる。本山では納めに来た人にお斎（精進料理）を出し、負担額による格付けを行い、多く支払った人は良い衣を着ることを許している。このような格付けを行うという点については、ご住職は見栄であると批判的であった。

同じ石川県内でも納骨の仕方に違いがある。能登では骨をすべて回収し、骨壺などに入れず骨だけを直に土に入れる。これは、「土に還す」という考えに基づくならわしである。一方、加賀では一部の骨のみを骨壺に納め、それを土に入れる。

3.2 墓の位置

Aさんによると、お盆である8月13、14、15日には墓参りを行うが、彼岸には墓参りはしない。最近彼岸参りも行う人が増えてきたが、元来はそのような習慣はない。墓を建てるのは家族単位で行われる。これは平等寺のご住職からも伺った。また、能登には元々合葬の文化はない。全国的にも合葬は少ないそうである。Aさんもそうであるように、この地域の人には所有している山に墓を持つ人が多く、遠くても家から300～500mの位置に墓がある。

⁴⁾ 子寺（こでら）については、本書第12章を参照のこと。

中斉の住民である B さん（男性、71 歳）からお話を伺ったところ、その地域に住む人の多くは、山を登ったところにある集合墓地に墓を持っていたという。

しかし、2007 年の能登半島地震により大量の墓の崩壊が起こった。墓への道が急斜面で、修繕が大変であることから、多くの家が自宅の敷地内に移した。墓の設置場所の条件として、生活用水が流れている川から離れていることが必要となる。また、移動予定地の半径 200m 以内の住民の許可をもらう必要がある。能登町役場の環境対策課の C さん（女性、40 歳くらい）によると、このようにして書類を作成して役場に提出し、許可を受けることで墓を建立することができるとのことである。この許可に能登半島地震との関係はない。許可申請を行う書類に理由を説明する欄はあるそうだが、地震の被害という理由よりも高齢化という理由が目立つそうである。B さんによると、能登町の町中などでは、周辺住民からの同意が得られず墓の移動に難行することが多いそうだが、旧柳田村内では、周囲の影響が少ないこともあり、特に問題が起きることもなく移動できた。

B さんは、地震により被害を受けたのち、いったん墓を修復したそうである。能登半島地震の被害を受けたことよりも、30m もの斜面を登る必要があり、しかも自動車を使って行くことのできない場所であるため、墓の管理や墓参りの際の身体的な苦痛が重くなったことが大きな理由であるとおっしゃっていた。墓を山の上から自宅の敷地内に移動した人は他にも 5~6 人はいるそうだが、そのような人も多くは同様に高齢化が原因であろうとのことである。

宝樹寺のご住職にも墓地や供養について伺った。宝樹寺には墓地はない。そのため、各家で各自の持つ山の地所に墓を建てる。盆の時期には各集落の門徒の墓を訪れ、お勤めを行う。能登の真宗大谷派に見られるように、彼岸参りは行っていない。墓を移動し、新しく建てる場合はその際にもお勤めを行う。

善唱寺のご住職もまた、この地域の人は家ごとに墓を持っているとおっしゃっていた。神和住では盆のお勤め・彼岸は行われていない。昔の人々は寺のすぐ上に墓を造った。自分が加齢により供養ができない状態になったとしても、寺の僧のお勤めの声が届くようにという思いからである。善唱寺の主寺である真念寺の上にはいくつかの墓があったが、善唱寺のご住職が子どもの頃の半分になった。

このようにさまざまな方に聞き取り調査を行わせていただいて分かったことに、まず、調査地域において彼岸参りは行われないということがある。また、後述するように町営の共同墓地が造られそこに建てられる墓の数が着々と増える中でも、上町地域の人々の墓は基本的には自分の家で所有している山に位置していることも分かった。

3.3 墓の外観や墓地利用

A さんのお話によると、現代は車社会なので墓の位置が離れていてもよく、能登三郷にある町営の共同墓地（以下、「共同墓地」）に墓を設ける人も多い。共同墓地の墓は年

に 10～20 基くらいのペースで増えているそうである。従来から一般的にみられる墓もあれば、新たな形式の墓もある。

従来からのものは墓石が縦に長いが、これは座禅を組む人の姿を表しているのではないかという説があると A さんは話してくださった。「南無阿弥陀仏」の文字が刻まれている墓は浄土真宗のものである。梵語が刻まれている墓もあり、真言宗のものではないかと教えていただいた。真言宗では毎年何百万もの塔婆を製造するために木材が大量に使われており、より経済的な方法がないか模索されている。

共同墓地は墓地の地面だけの分譲の費用は 45 万円である。面積は 2～3 坪程度なのでとても費用がかかる。また、墓を一基建てるには 150 万円ほど必要だが、墓の規模が大きくなればさらに金額は上がる。つまり、家柄と墓の規模は比例する。その例となる大規模な墓を以下に紹介する。

共同墓地の中に、2013 年くらいまで信用金庫の頭取を務めていた方のものと思しき墓があった。墓地の中でも一際大きく、曲面に削られている部分もあることから、500 万円ほどの費用を要したのではないかと A さんは推測された。

共同墓地とは別の場所に、4 代続いている開業医の方の家のもので、柳田村で最大の墓もあった。その家の初代は医師で、私財を投入し、柳田農業高校を設立した方だと伺った。

宝樹寺のご住職は、元々真言宗では土葬が多く、墓石はただの目印だったと話してくださった。しかし、近年は業者が能登にいる関係もあり、墓も立派なものがつくられるようになった。その他、昨今では寺に代わって葬儀屋が葬儀を仕切るようになった。

平等寺のご住職も、昭和 20 年代辺りまではあくまでも一部ではあるが土葬も見られたが、昭和 30 年代以降は真言宗でも火葬をするようになったとおっしゃっていた。この地域の周辺にはさほど古い墓は見られず、あるとしたら天保年間（1830～44）以降のものであるとのことである。

上町地区においても、近年では墓は多様化してきた。墓の形、墓に彫られる文字にさまざまな種類のものが見られるようになった。例えば、従来は「南無阿弥陀仏」と刻まれた墓が多かったが、今日では「感謝」「倶会一処」「空」「ありがとう」などの文字が彫刻されたものも目立つようになり、墓が個性的になった。このことは共同墓地に並ぶ墓からもうかがえる。



写真 1 曲面に削られ装飾された墓
(2016 年 11 月 12 日、筆者撮影)

このような墓は亡くなった人の気持ちやお参りする人の気持ちを表している。平等寺のご住職はこのように述べ、「それぞれの人が納得できればよく、決まった正解はない」と話してくださいました。

4. 新しい形式の墓と供養

本節では、調査地域での墓や供養のあり方に関する画期的な取り組みについて、平等寺の永代供養やペット供養、善唱寺の合葬の試みについてそれぞれのご住職にお話を伺ったものをまとめる。

4.1 永代供養

日本全国の多くの地方と同様に、能登でも過疎化が進行し、それにより家を存続させることが難しくなってきた。1965年頃からは「総墓」と呼ばれる先祖代々の墓を一つにまとめたものが登場したが、近年ではそれさえも維持できなくなってしまった。

平等寺の檀家さんの中にも子どもが女の子のみであったり、男の子がいても就職先を求めて都市部に出て行き疎遠になってしまったりして、継ぐ人がいなくなってしまう家が増えてきた。その場合の墓は参る人がいなくなり、無縁墓になってしまう。そこで、2002年5月から寺で遺骨を預かるようになった。

永代供養は過去帳に法名を掲載した人を死後33年または50年経過したのちに合祀するものである。「過去帳」とは故人の法名と死亡した年月日を記したもので、亡くなった人の戸籍簿のようなものである。最近ではあまり使われない表現ではあるが「鬼簿帳」という別称があり、これは中国では「鬼」の字が亡くなった人のことを指すことに由来する。



写真2 「温」と書かれた墓
(2016年11月12日、筆者撮影)



写真3 永代供養塔
(2016年11月22日、筆者撮影)

永代供養にかかる費用には地域差がある。地方によって地価が異なることもその要因の一つではないかと考えられ、都会では100万円ほど必要になる場合もある。

平等寺では永代供養の納骨料を以前は三十三回忌までで10万円、五十回忌までで20万円と設定していたが、現在は一律15万円である。これは通常の墓と比べて格段に低価格のものである。

4.2 ペット供養・水子供養

これまで、能登ではペットを墓に祀る慣習はなかった。そのため、現在も人々のペットを墓に祀ろうという気持ちは希薄である。

しかし、平等寺では2013年あたりからペット葬を行っている。寺で柴犬を飼ったことがきっかけに始まったもので、これまでに供養を行ってきた事例は2件である。永代供養と同じく、平等寺のペット供養は金沢のものよりも少額の費用負担で行っている。

ペットを可愛がる人にとって、動物も心の支えとなる。そのような大切な存在の死を悼む人のために、供養をすることは大切である。「愛犬・愛猫・愛鳥等」とパンフレットには記載されているが、ペットの種類は限定しておらず、どのような生き物でも供養を行っている。これは飼い主の気持ちを癒すことが大切だからである。人間の葬式にも遺族の心を癒すという働きがあり、この働きは人以外の動物の供養にも通じている。

真言宗には動物を供養するための作法がある。供養の際は、馬頭観音をまつ。馬頭観音は、昔は農業のために飼育されていた牛や馬の死後の供養のためにまつられていた。平等寺で行われている現在のペットの供養においても、馬頭観音を祀り、葬式から納骨までを行う。

葬式を終えると能登三郷斎場でお骨にする。同じ能登の中でも、七尾市や珠洲市にもペット供養が行われている寺があり、寺で火葬を行う所もある。七尾市三引町にある高野山真言宗の、「赤蔵山 怡岩院 (いがんいん)」という寺のホームページによると、そこでは葬儀をどこで行うか、収骨を誰が行うかによりさまざまな形態の火葬を扱っている。

平等寺では水子供養も行っており、供養料は5,000円からとなっている。頂いたパンフレットによると、「水子」とは「流産・死産・中絶などのために、日の目を見ず母の温かい手に触れること



写真4 ペット供養墓
(2016年11月22日、筆者撮影)

のなかった子ども」のことである。年間何件かの依頼があるそうだ。

4.3 新たな供養に見られる時代変化への対応

永代供養やペット供養、水子供養などの取り組みについて、「寺も時代に対応しないとやっていけない」と平等寺のご住職は話してくださった。

永代供養・ペット供養・水子供養などの取り組みは独自に行っているものである。これは当然のことで、近くの寺と同じことをしていると競合してしまうからである。「他人がしたからその真似をする」というあり方ではいけない。普通の店と同じように人が来なければ成り立たないので、寺であっても、来てもらえるように独自の特色が必要である。

近年ではマスコミやインターネットの力も大きい。これらの情報源のおかげで多くの人が訪れるようになり、その中には若者や外国人も見られる。

4.4 合葬

以下では善唱寺のご住職に伺った合葬に関するお話をまとめる。ご住職は、御骨に執着しない人もいること、本来の教えが墓に固執するものではないことから、合葬を提案している。

先祖の墓に執着する人もいればしない人もいる。東京の辺りでは骨箱が邪魔で、わざと電車などに置き忘れる人もいるそうである。周辺地区にも共同墓地があるが、若者がずっと墓を守ってくれるという保証もない。

また、浄土真宗の本来の教えは墓にこだわるものではなかった。墓はつくらなくてもよいものであり、墓参りも元々「南無阿弥陀仏」という教えに帰依するものである。立派な墓を建てることはただの見栄であり、そのような墓を造って「骨にお参り」をすることは正しいこととは言えない。

そこで、本来の考え方に従い、大きな共同墓を寺に造り、さまざまな人が納骨できるようにすることを善唱寺や真念寺は検討している。真宗の教えにも「俱会一処」という言葉があり、「みんな同じ所で会いましょう」という意味を持っている。共同墓はこの考えに基づいている。

前述の通り、ご住職は京都の本山での金額による格付けを批判している。対照的に、共同墓は従来と異なり貧富の差別がなく、合理的である。また、墓守をする人がいるかどうかは怪しい田舎であるからこそ、よりこのやり方が望ましいとご住職はおっしゃっている。

5. 考察

納骨を行う時期については、上町地区においても四十九日法要の後が多く、全国で一般的に行われているものとその点において共通していることが分かった。

他方で、京都の本山や金沢の別院に納める人がいることは全国のものと比較した納骨における上町地区の特徴として挙げられる。能登は「真宗王国」と呼ばれ、浄土真宗などの仏教がとても盛んな地である。そのため人々の信仰心も強く、本山に納骨するなどして確実に成仏できるよう願ったのであろう。しかし、近年ではそのような人も少なくなっている。以前は別院への納骨が、距離や金額の面で京都の本山への納骨を諦めた場合の代わりになるものであった。だが、近年では遠い所・多額の費用を要する所への納骨は大きな負担になるという事情が信仰心よりも大きくなり、金沢の別院にすら納めない人が増えたのではないかと思われる。

全国的には、墓は公営にせよ私営にせよ何らかの「墓地」に建立するのが一般的であろう。しかし、上町地区では多くの家が自己で所有する山や私有の敷地内に墓を持っており、たいへん特徴的である。地域の方にお話を伺い、加齢に伴い、山の上などの歩いていくよりほか交通手段のない位置に墓がある場合は、自宅敷地内へ移動する人も多いことが分かった。他方、共同墓地にも年を追うごとに墓が増えている。自動車の通行できる道路が整備されており、アクセスしやすいことも共同墓地の人気の理由の一つであると考えられる。

さまざまな寺のご住職から墓について教えていただき、墓石は元々ただの目印程度のものに過ぎず、近代以降になり、家単位での立派なものが造られるようになったと分かった。善唱寺のご住職は浄土真宗の教えは墓を建てることを義務付けてはいないとおっしゃっていた。

調査地域での墓や供養において、全国的なものよりも少額の費用負担でよいことが特徴的である。その要因には地価ももちろん関係するが、それだけではない。虚栄心によって立派な墓を建てることの無意味さや時代の変化などを考慮した上での柔軟な考え方がその根底にあるのではないかと考えられる。

墓は故人を弔う上での形に過ぎず、本質ではない。それゆえ、神経質に近代以降の墓のあり方にこだわる必要はない。能登三郷斎場の共同墓地にも、全国のものと同様に、新たな形の墓が見られる。墓の変化はこのような表面上のものにとどまらない。現代では「家」の崩壊が進み、人々の生き方は多様化している。平等寺のご住職は、寺もこのような時代変化に対応しなければならないと教えてくださった。『お墓の社会学』では、これからは個性に応じた墓のあり方が求められていると述べられていた。平等寺の永代供養やペット供養などの取り組み、善唱寺と真念寺で検討している合葬などもこれに類似しており、供養に対する新たな考え方に基づいて生まれたものである。「墓は家単位でなければならない」、「墓は費用を惜しまず立派なものを建てなければならない」という固定観念を捨て、千差万別の生活様式にも対応できるような弾力性のある墓や供養の選択肢が能登でも生まれつつある。

6. おわりに

聞き取り調査をさせていただくことは今回が初めてで、とても新鮮な経験となりました。自分の住む場所から少し離れた地域でお話を伺い、まだまだ知らないことも多いかと思いますが、訪れた地区での生活の様子やその特徴について少しでも知ることができ嬉しかったです。

お仕事などのご自身の生活もある中、調査のためにお時間を割いてくださった地区の方々、能登町役場の方々に言い尽くせないほど感謝しています。私はぎこちない部分が多かったと思いますが、地域の皆さまが優しく話をしてくださったおかげで、たいへん稚拙ではありますが墓と供養について報告書を作成させていただくことができました。能登の方々の生活の中心に、人々の優しさがあるのではないかと思います。この度は、本当にありがとうございました。